

# 知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第14回】

望月雅彦(もちづき・まさひこ)

ボルネオ史料研究室主宰、法政大学沖縄文化研究所国内研究員

女流作家・林芙美子、マレー半島に行く

林芙美子(1903~51)の作品の中に「椰子の実」という短篇小説がある。

内容は林芙美子が旅先の大島(現・東京都大島町)で、マラッカの宿で女中をしていた日本女性と再会。その女性との不思議なめぐり合わせを、島崎藤村の「椰子の実」を想起して「人間とは哀れな椰子の実である。運命という広い海原を、椰子の実はさすらう」と書いている。

このマラッカの宿で女中をしていた日本女性に大島で会ったというのは、彼女の創作であろう。し

## 日本軍占領下の南方地域を視察 マレー半島の風景と人々の姿映す

かし林芙美子がマレー半島のマラッカに行っていたことは事実で、1942年の11月下旬、日本軍占領の時期であった。林芙美子一行は、同年10月31日、広島宇品港を出航、門司港に仮碇泊、翌日シンガポール(当時は昭南と言われていた)向け病院船「志かご丸」で直行、昭南に11月16日に到着した。昭南に暫く滞在。その後ジョホール・バルを経てマレー半島西海岸を北上し、タイ領に近いアロー・スターまで行き、また昭南へ戻り短日間ながら縦断を果たしている。半島部だけではなくペナン島のヘビ寺も見学したようである。

もちろん、物見遊山の旅ではない。林芙美子は陸軍報道部事務嘱託の身分で、日本軍が占領した南方地域に派遣されていたのである。この時派遣されたのは、林芙美子を含め5人の女流作家と雑誌編集者、新聞記者など総勢17名であった。陸軍報道部の目的は、日本軍政の浸透度や現地人の民情などの情報を収集し、その成果を日本国内の新聞、雑誌、ラジオなどで発表させ、戦争プロパガンダに

利用することにあつた。新宿博物館所蔵の林芙美子資料「南方従軍時ノート」には「11月23日、朝雨あり。11時シンガポール発ジョホール通過してバトハパト(原文ママ、バトウ・パハ)に到る2時頃。菅原守備隊長に会う。ここは残存せる小野ヨシ老女に会う。67才の由なり。東京目黒に生れし由。30年間バトハパトに居住。友人をたよってバトハパトに来る由。主人、息子は病死」とある。現在では67歳で老女などと書くとお叱りを受けるかもしれないが、なにぶん原文に忠実をモットーとしているのでご寛容願いたい。また同資料に「マラッカにも日本婦人が居た」と記している。このマラッカ在留日本婦人から簡単なマレー語の単語を習っている。

この婦人が短編小説「椰子の実」のモデルかもしれない。この資料から林芙美子が積極的に現地邦人に取材をしていること、日本人が太平洋戦争のはるか以前からマレー半島に進出していることが分かる。林芙美子は日中戦争に従軍、女性作家として南京、漢口一番乗りを果たし、『戦線』、『北岸部隊』などの戦場ルポを出版している。積極的に戦争の広告塔として活動していた林芙美子の目には、占領者側の女性としてマレー半島の風景や、そこに暮らす人々はどう映っていたのであろう。

【執筆者プロフィール】1952年静岡県生まれ、放送大学教養学部卒、故・和田久徳氏(御茶ノ水女子大学名誉教授)に師事。ボルネオ島と日本人の関係史を研究。『ボルネオ・サラワク王国の沖縄移民』(1994:ひるぎ社)、『ボルネオに渡った沖縄の漁夫と女工』(2007:ヤシの実ボックス)、『林芙美子とボルネオ島 - 南方従軍と『浮雲』をめぐって - 』(2008:ヤシの実ボックス)など論文著述多数。2000年に研究用HP「websiteボルネオ研究」http://borneo.web.infoseek.co.jp/を開設。